# 労働映画百選通信 No.14 2017.01

発行■NPO法人 働く文化ネット　編集■清水浩之　〒101-0062 千代田区神田駿河台3-2-11 連合会館5F

**労働映画鑑賞会** 第35回 2017年 2月 9日(木)18時から（プログラムは次ページをご覧ください）

会場◎連合会館（地下鉄 新御茶ノ水駅 B3出口すぐ）参加費無料・申込不要

【上映情報】労働映画列島！1月～2月 ※《労働映画列島》で検索！http://d.hatena.ne.jp/shimizu4310/00170103

**◎新作ロードショー**

**ごはん** 《1月21日(土)から 東京 新宿バルト9ほかで公開》
京都在住の安田淳一監督による長編第2作。大規模稲作に取り組んでいた父親の急逝をきっかけに、OLだった娘が米作りに奮闘する。(2016年 日本 監督/安田淳一) https://www.facebook.com/kenjutomedamayaki/

**未来を花束にして** 《1月27日(金)から 東京 日比谷 TOHOシネマズシャンテほかで公開》
20世紀初頭のロンドンで、参政権を求めて立ち上がった女性たち。実話を基に描くヒューマンドラマ。
(2015年 イギリス 監督/サラ・ガヴロン) http://mirai-hanataba.com

**息の跡** 《2月18日(土)から 東京 ポレポレ東中野ほかで公開》
岩手県陸前高田市の種苗店主・佐藤貞一さんを記録したドキュメンタリー。津波で流された店舗を自力で再建し、被災体験や郷土の歴史を外国語で綴る日々を見つめていく。(2016年 日本 監督/小森はるか) http://ikinoato.com/

**◎名画座・特集上映**

【東京 新橋 ヤクルトホール】1/28・29「**アムネスティ・フィルム・フェスティバル**」…おじいちゃんの里帰り(トルコ)／他
【東京 神保町シアター】2/4～3/3「**あの時代(とき)の刑事(デカ)**」…暁の追跡／特別機動捜査隊／マークスの山／他
【東京 座・高円寺】2/8～12「**座・高円寺ドキュメンタリーフェス**」…最後の木こりたち(中国)／BASURA (フィリピン)／他
【東京 ラピュタ阿佐ヶ谷】2/12～4/15「**昭和の銀幕に輝くヒロイン 鰐淵晴子**」…明日はいっぱいの果実／母と娘／他
【秋田県民会館】2/17・18「**あきたクラシックシネマ**」…本日休診／駅前旅館／喜劇・女は男のふるさとヨ／他
【名古屋シネマテーク】1/21～27「**イスラーム映画祭**」…マリアの息子(イラン)／神に誓って(パキスタン)／他
【岐阜 ロイヤル劇場】2/4～17「**山崎豊子原作 浪花に生きた男と女の物語**」…暖簾／横堀川
【大阪 九条 シネ・ヌーヴォ】1/21～2/17「**東陽一映画祭**」…沖縄列島／サード／橋のない川／だれかの木琴／他
【宝塚シネ・ピピア】2/18～「**2016秀作映画特集**」…湯を沸かすほどの熱い愛／ベストセラー／オーバー・フェンス／他
【山口県光市民ホール】2/11・12「**名画劇場**」…カルメン故郷に帰る／喜びも悲しみも幾歳月／二十四の瞳／他
【北九州市環境ミュージアム】1/27～29「**東田シネマ vol.26**」…アフガニスタン 用水路が運ぶ恵みと平和／他
【福岡市総合図書館 シネラ】2/1～26「**現代韓国映画特集**」…吠える犬は噛まない／もし、あなたなら／他
【福岡 中洲大洋映画劇場】2/11～3/3「**溝口健二＆増村保造映画祭 変貌する女たち**」…噂の女／夫が見た／他

## 日本の労働映画百選 http://hatarakubunka.net/

『明治の日本』(1897)から『下町ロケット』(2015)まで！“働く姿”を描いた百本をセレクト

映画は日本の仕事と暮らし、働く人たちの悩みと希望、働くことの意義と喜びをどのように描いてきたのか。
働くことの今とこれからについて考えるために、一世紀余の映画史の中から百本を選びました。

特定非営利活動法人 働く文化ネット・労働映画百選 選考委員会

**明治の日本／川崎三菱労働争議／何が彼女をそうさせたか／第十二回東京メーデー／隅田川／生れてはみたけれど／有りがたうさん／戦ふ兵隊／煉瓦女工／機関車Ｃ５７／或る保姆の記録／わたし達はこんなに働いてゐる／驀進／炭坑／われら電気労働者／海に生きる／白雪先生と子供たち／どっこい生きてる／生きる／おかあさん／１９５２年メーデー／女ひとり大地を行く／蟹工船／京浜労働者／太陽のない街／立ち上がる女子労働者／ここに泉あり／赤線地帯／喜びも悲しみも幾歳月／ボタ山の絵日記／雪と闘う機関車／にあんちゃん／海に築く製鉄所／刈干切り唄／年輪の秘密／大いなる旅路／裸の島／1960年6月 安保への怒り／西陣／キューポラのある街／その場所に女ありて／ある機関助士／ドキュメント 路上／６８の車輪／こころの山脈／若者たち／農薬禍／和賀郡和賀町／黒部の太陽／太陽の王子 ホルスの大冒険／男はつらいよ／シップヤードの青春／家族／戦争と人間 三部作／友子儀式／日本の稲作／詩人の生涯／トラック野郎 御意見無用／どっこい！人間節／日没の印象／男たちの旅路／日本の戦後／あゝ野麦峠／ザ・サカナマン／遠雷／海峡／原発はいま／魚影の群れ／ガン・ホー／マルサの女／母さんが死んだ／魔女の宅急便／あーす／月はどっちに出ている／踊る大捜査線／鯨捕りの海／鉄道員 ぽっぽや／人らしく生きよう 国労冬物語／こんばんは／県庁の星／フラガール／三池 終わらない炭鉱の物語／ハゲタカ／ハケンの品格／おくりびと／フツーの仕事がしたい／ブラック会社に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない／任侠ヘルパー／孤高のメス／昭和の家事／サウダーヂ／舟を編む／ある精肉店のはなし／ダンダリン 労働基準監督官／ＷＯＯＤ ＪＯＢ！／紙の月／夢は牛のお医者さん／昼めし旅／種まく旅人 くにうみの郷／下町ロケット**

## 【作品ガイド】『香港、華麗なるオフィス・ライフ』

【DVD】アメイジングD.C.

原題「華麗上班族(Office)」 2015年/118分 香港＝中国 監督/ジョニー・トー
出演/シルヴィア・チャン(社長) チョウ・ユンファ(会長) イーソン・チャン(副社長)
タン・ウェイ(経理担当) ワン・ズーイー(新入社員) ラン・ユェティン(会長の娘)
《作品紹介》女優・監督として活躍するシルヴィア・チャンの舞台劇を「香港ノワール」の巨匠、ジョニー・トー監督が映画化。株式上場を控えた商社を舞台に、社長から新入社員まで様々な立場の人々の欲望と愛憎を、ミュージカル形式で描き出す。

### 歌って恋して抗争もして！華麗なるオフィス・ミュージカル　文:波多楽久

エドワード・ヤン『海辺の一日』(1983)、ツイ・ハーク『上海ブルース』(1984)など1980年代の台湾・香港ニューウェイヴ映画に主演、その後も監督・プロデューサーとして活躍を続けるシルヴィア・チャンが創作した舞台「華麗上班族之生活與生存」(2008年初演)をミュージカル映画化した作品。原題の**「上班族」**とは**サラリーマン**のことで、オリジナルの舞台が北京、上海、香港、台北、シンガポールなど各都市で好評を博したように、中国圏の都会人なら誰もが共感できるであろうビジネス・ライフが描かれている。柱と梁だけでシンボリックに表現された会社や街は「大都会」とだけ表示され、香港、中国、台湾など各地から集まった俳優陣もそれぞれの言葉で話している。

映画はフレッシュな新入社員、リー・シャン(李想)の視点で巨大なオフィスに入っていく。**「想は夢想の想です」**と自己紹介する彼にとって、重役専用のエレベーターがあったり、上役全員の飲み物の好みを暗記しなくてはならない「サラリーマン社会」は驚くことばかり。同期入社の才媛・ケイケイと助け合いながら仕事を覚えていくが、彼女は会長の一人娘であることを隠してビジネス修行を始めたのだった。

「本土」と呼ばれる中国大陸の窓口となり、衣料や化粧品の輸出入で成長してきた商社は株式の上場を控えている。社内を取り仕切るのはエネルギッシュな女社長・チャンだが、彼女は会長・ホーの愛人と噂され、その一方では若い副社長・デビッドとも関係を持っている。彼女の出世の秘訣は**公私を問わない「全方位外交」**であり、新人のリー・シャンが有能と見るとさっそく可愛がるのだが、会長の娘・ケイケイは、なりふり構わず生き抜いてきた女社長を嫌う。順風満帆に見えた社内だが、リーマン・ショックを境に事態は急変。野心家の副社長は株暴落で窮地に追い込まれ、経理担当の美女・ソフィを巻き込み不正に手を染める・・・。

近未来をイメージさせるスケルトンのオフィスで、売上に狂奔し、達成感に酔い痴れる社員たちが早口でまくし立てるように歌う。しかし、ビルの屋上でタバコを咥えた時や、深夜のアパートで独りになった時には自らの心情を切々と歌う。イケイケの副社長に扮したイーソン・チャンは香港随一の実力派歌手で、映画が進むに従って彼の歌声と表情が観客を惹きつけていく。**「職場か、賭場か」**と嘯く中堅社員の命懸けの姿が、同世代のビジネスマンたちの共感と同情を集めるのは間違いない。

そしてシニア世代も暗闘を繰り広げる。ダンディな会長とエレガントな女社長は最良のパートナーだったが、会長は純粋なリー・シャンを操って社長の「二股交際」を監視し、不正経理の発覚を機にあっさりと放逐してしまう。情け容赦ない社内抗争劇の鮮やかさは「香港ノワール」の巨匠、トー監督ならでは。サラリーマン・ミュージカル映画といえば、日本でも50年前にフランキー堺・雪村いづみ主演の傑作『**君も出世ができる**』(1964、監督・須川栄三)が作られているが、こちらが**「和」の精神**の家庭的なオフィスだったのに対し、中国社会はどこまでもハードボイルドだなぁ……と再認識した次第です。

---

NPO法人 働く文化ネット **労働映画鑑賞会**

働く文化ネットでは、毎月第2木曜日に労働映画鑑賞会を開催しています。
どなたでも参加できます。お気軽にご来場ください。

**第35回　～アニメーションと労働～**

・開催日:2016年 **2**月 **9**日(木)**18:00～** (参加費無料・申込不要)
・会場:**連合会館 201会議室** (地下鉄 新御茶ノ水駅 B3出口すぐ)
・上映作品(労働映画の視点から、アニメ作品を3篇ほど上映予定)

## 詩人の生涯　1974年/9分 【労働映画百選 No.57】

安部公房の小説をパステル画で表現したアニメーション。工場を解雇された青年が、貧しさの中で「詩人」として目覚めるまでの物語。(製作・監督/川本喜八郎)

## 【労働映画のスターたち】第14回「サリー・フィールド」

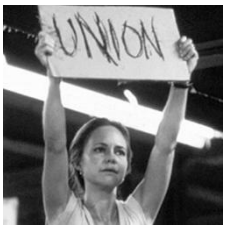
### 大地に根を張って生きる　アメリカン・ガールの半世紀

文：百永良武

アッと驚く結果となったアメリカ大統領選を記念し(？)、今回はハリウッド・スターが初登場。労働映画の名作『**ノーマ・レイ**』(1979)と『**プレイス・イン・ザ・ハート**』(1984)で、アカデミー主演女優賞に2度輝いたサリー・フィールドをご紹介したい。**垂れ目のタヌキ顔**が特徴で、洋画ファンには陽気なヤンキー娘(『**トランザム7000**』1977)や、気丈なお母さん役(『**マグノリアの花たち**』1989)などで親しまれてきた彼女。近年はスティーヴン・スピルバーグ監督の大作『**リンカーン**』(2012)で、派手好きで激しい気性の大統領夫人・メアリーを演じて注目された。いずれの役柄も、アメリカの大地に「根を張って」生きる、たくましい女性たち。各地の町や村で平凡な人生を歩みながら、全身で喜怒哀楽を表現することができる「魅力的な庶民」だ。

いたずら天使(1967)

1946年、カリフォルニア州生まれ。トランプ、ヒラリーと同じ「ベビーブーマー」世代。父は軍人、母は女優。娘も10代後半から演技の道に進み、1965年のテレビドラマ『**ギジェットは15才**』で、主人公のサーファー娘に抜擢される。続く『**いたずら天使**』(1967～70)では「**空を飛べる修道女**」に扮し、行く先々で珍騒動を巻き起こす姿が人気を集める。20代はキュートなコメディエンヌとして活躍した。



ノーマ・レイ (1979)

1976年、テレビドラマ『Sybil (**失われた私**)』で解離性同一性障害の女性を演じ、「カワイコちゃん」から演技派女優へと脱皮。バート・レイノルズとの陽気な掛け合いが楽しいカーアクション映画『**トランザム7000**』の後、一転して紡績工場で働く女性が労働者意識に目覚めていく姿を描いた社会派映画『**ノーマ・レイ**』に主演する。

プレイス・イン・ザ・ハート
(1984)

ノーマは子持ちでバツイチ。彼女が暮らす南部の町は典型的な企業城下町で、家族みんなが同じ職場で働いてきた。しかし、全米繊維組合から派遣されてきた男(ロン・リーブマン)と出会い、劣悪な労働環境の中で終わっていく人生に疑問を抱く。工場内での組合結成に向けて奔走し、初めて警察に逮捕された夜。家で待っていた子供たちを集めて「**あなたたちに、同じ人生を歩んでほしくはないの**」と語る場面は、自らの意志を持った労働者が誕生する瞬間として忘れがたい印象を残す。

パンチライン (1988)

2度目のオスカー受賞作『**プレイス・イン・ザ・ハート**』の舞台は、1930年代のテキサス。保安官の夫を事故で失い、子どもを抱えてどう生きていくか途方に暮れた主婦・エドナが、恐慌で職を失った黒人(ダニー・グローヴァー)らの協力を得ながら、綿花の栽培に乗り出す。借金の取り立て、自然災害、人種差別主義者の暗躍など様々な試練に直面していくエドナ。綿花の摘み取りは手にトゲが刺さって痛いそうで、泣きながら摘み取りを続ける彼女の表情が、多くの観客の共感を呼んだ。

サリー・フィールド自身の半生が投影されたような傑作が『**パンチライン**』(1988)だ。地方のライブハウスで漫談を演じていた主婦・ライラが、天才的な若手芸人(トム・ハンクス)に才能を見出され、「一緒に都会に出よう」と誘われる。堅物の夫がいる家庭生活との板挟みに悩むライラ。やがて彼女は、妻であること、母であることとともに、「芸」もまた生きがいなのだ！と家族に宣言し、この街で生きていくことを選ぶ。笑って泣けるこの作品は、「空を飛べる」才能で人々に幸せを運んだ『いたずら天使』の、20年後の続編にも思えてくる。

フォレスト・ガンプ
(1994)

3作品のいずれも、ヒロインが自立すると、彼女の生き方を「変えた」男性は去っていくという展開が興味深い。**置かれた場所に根を張って、枝を伸ばしていく**女性たちのたくましさが、海外でも支持されるアメリカ映画独特の魅力なのかも知れない。

その後もコメディからサスペンスまで、様々なジャンルの映画に出演。夫に代わってバリバリ働く妻を演じた『**ミセス・ダウト**』(1993)。障害を抱えた息子を励まし続ける母に扮した『**フォレスト・ガンプ**』(1994)。テレビでも『**ER 緊急救命室**』(2000～06)や『**ブラザーズ＆シスターズ**』(2006～11)のエキセントリックな母親役が人気を集めた。

ドリスの恋愛妄想適齢期
(2015)

一昨年には、60代独身女性のラブコメディ(！)『**ドリスの恋愛妄想適齢期**』(2015)で久々に主演。母親を看取った後の「2度目の独身生活」で、突然の恋に舞い上がる主人公のドリスを、リアリティを保ちつつキュートに演じられるのは、彼女しかいない。

去年11月に70歳になったサリー・フィールド。今後も新作が待ち遠しい存在だ。願わくば、フィクションだけでもいいから「**女性大統領**」役を実現させてほしいなあ…。

【労働映画のスターたち】第15回「平泉 成」

## ラーメン総理、ゴジラと対決！大いなる「凡人」の長い道程

文：百永良武

シン・ゴジラ（2016）

「あーあ、（ラーメン）伸びちゃったよォ……」。去年の夏、予想を超える大ヒットを記録した映画『**シン・ゴジラ**』（2016、総監督・庵野秀明）で、ゴジラの襲来後に急遽内閣総理大臣に指名された前農水相・里中（平泉成）の最初のセリフだ。初代ゴジラから62年後に生まれた新作は、シリーズの「様式」を徹底的に裏切り、原発事故後の日本社会を諷刺する異色作。官邸内での会議が延々と描かれ、そこで決まった対策がゴジラによってことごとく覆されていく展開は、日本人なら誰もが**「6年前の3月」**を連想するだろう。頼みの自衛隊もまるで歯が立たず、首都・東京が絶体絶命の危機に陥った時に登場するのが、俳優生活50年のベテラン・平泉成が演じる「ラーメン総理」だ。

あゝ海軍（1969）

一刻も早くゴジラを始末したいアメリカ政府は「都心への核攻撃」を主張し、日本政府も（現実と同様に）逆らえない。首都圏に住む一千万人規模の避難計画が浮上するが、平泉扮する臨時総理は、あの独特のかすれ声で**「避難というのは、生活を根こそぎ奪ってしまうことなんだ。簡単に言ってほしくないなぁ」**と呟き、核攻撃を回避するための“時間稼ぎ”に奔走する。ゴジラ対策（＝冷温停止！）には名も無き技術者や現場責任者たちが奮闘し、巨大なゴジラに「創意工夫」で立ち向かう。すなわち**「ゴジラ対サラリーマン社会」**だ。このフシギな映画を成立させたのが、300人を超える「ノースター」キャストであり、その頂点といえる「凡人宰相」役が、主演作を1本も持たない俳優・平泉成の、現時点での代表作になったと思う。

男どき女どき（1985）

1944年、愛知県出身。本名は平泉征七郎。高校卒業後、ホテルに就職したが、ここで時代劇スター・市川雷蔵と知り合い、1964年に大映京都撮影所のニューフェイスとなる。デビュー当時はスラリとした青年で、善良で熱血漢のお兄さんといった役柄が多かった。戦記映画『**あゝ海軍**』（1969、監督・村山三男）では、海軍兵学校に入った若者たちを鍛える先輩学生役。奇才・寺山修司が初めて手掛けた長編映画『**書を捨てよ町へ出よう**』（1971）でも、寺山自身を投影した地方出身の主人公が憧れる、都会っ子のスポーツマン役だった。しかし、大映は1971年暮れに倒産。映画俳優としてのホームグラウンドを失った平泉は、テレビに活路を求めた。

その男、凶暴につき（1989）

1970年代のテレビ界は、刑事ドラマと時代劇の黄金時代。30代に入った平泉は「青春」のイメージから卒業し、体格と風貌を活かした「犯人」「容疑者」役が相次ぐ。『**太陽にほえろ**』『**Gメン’75**』『**特捜最前線**』『**必殺仕事人**』などの長寿番組では繰り返し“悪事”を働いた。この頃に鍛え上げたポーカーフェイスは、やがて刑事役でも活かされるようになり、『**はみだし刑事情熱系**』（1996～2004）などでレギュラー陣に定着。刑事・平泉の取調室での会話は、物まね芸のレパートリーにもなっていく。

サラリーマンNEO（2006）

私が初めて「俳優・平泉成」の存在を意識したのは、1985年にNHKで放送された短篇ドラマ『**男（お）どき女（め）どき**』だった。向田邦子のエッセイを岸本加世子が朗読し、それに合わせてドラマが展開していく形式で、平泉は、かつての浮気が家族にバレるのではないかと動揺する中年男の役。朗読がメインなのでセリフはほとんどなく、視聴者は登場人物の挙動を「実況アナウンス」とともに見るスタイルだが、一家団欒の中、ひとりだけ内心で冷や汗をかいている平泉の姿は絶品だった。

年齢を重ねるうちに会得した独特の「味わい」を最初にクローズアップした作品は、ビートたけしこと北野武の初監督映画『**その男、凶暴につき**』（1989）だろう。平泉は人情派のベテラン刑事として登場するが、麻薬密売事件の捜査の過程で、次第に「裏の顔」が明かされていく。平泉の風貌を活かした企画としては、NHKのコント番組『**サラリーマンNEO**』（2006）での、“重役にしか見えない22歳”がサラリーマン社会に様々な波紋を巻き起こすシリーズ「大いなる新人」も忘れられない。

華麗なる一族（2007）

木村拓哉主演のドラマ『**華麗なる一族**』（2007）、『**CHANGE**』（2008）、『**MR.BRAIN**』（2009）では、超人・木村を親身になって支える「叩き上げ」の役を務め、ともすれば荒唐無稽になりがちな世界観の安定に貢献した。平泉は自身の俳優人生について、「主役が松坂牛であれば、オレは脇にある大根やニンジン……**根菜になってやろう**」（2015年、NHK「スタジオパーク」）と語っているが、映画・テレビを合わせて約1,000本の出演歴がありながら、最近まで「この1本」と呼びたくなる代表作が見当たらなかったのは、魅力的な「凡人」に徹してきたからなのかも知れない。噛めば噛むほど味わい深い**大いなる「凡人」**、平泉さんの活躍がこれからも楽しみです。